

国立劇場おきなわ

国立劇場おきなわは、「組踊」をはじめとする沖縄伝統芸能、芸能伝統を踏まえた創作、本土の伝統芸能やアジア、太平洋地域を中心とした海外の民族芸能などの公演を行うと同時に、沖縄伝統芸能の伝承者の養成、研修を行うことを目的として設立された。この劇場は、主舞台、上手袖舞台、下手袖舞台を持ち、回り舞台、前舞台迫り、花道迫り等の床機構を設備した大劇場（客席数：632席）、小規模の公演、研修等に用いられる小劇場（客席数：255席）の2つの劇場と共に、多数の稽古場、研修室等を有している。



沖縄伝統芸能は元来、屋外に舞台を設営することを前提としており、歌舞伎やオペラのように、演技形式と上演空間の相補的な発展や変化に伴って、劇場形式が変遷したという経緯をたどっていない。この劇場の設計は、歌舞伎小屋やオペラハウスのように直接的に範とするものがなく、沖縄において地元の演者、演奏家、演出家、劇作家、舞台技術者、研究者の知見に耳を傾け、議論を重ねることから始められた。このヒアリングワークショップにおける議論は、大きく以下の二つに集約されることとなった。

組踊をはじめとする沖縄伝統芸能のための劇場のあり方、及び舞台・客席形式は何か

大劇場は、琉球王朝時代の宮廷芸能の舞台形式と、現在の沖縄伝統芸能の舞台形式の2つを並立させるため、オープンステージとプロセニウムステージの両機能を備えた可変式舞台とした。

組踊舞台（オープン舞台）の位置、オープン形式・プロセニウム形式の可変方法、設置する舞台床機構（回り舞台・前舞台・花道等）及び設備、そして客席形式・意匠等について、ヒアリングワークショップにおいて図面、模型、CG等を元に議論、さらに仮設舞台を実際に設え検証を行った。

大劇場の意匠は、日本の伝統的な芝居小屋のスタイルである箱型の形状と、木の縦格子で構成している。ホールや劇場の客席の壁面や天井面は、建築音響の見地からエコーや音響障害が発生しないよう、雁行したり、斜めの反射面をつけた拡散形状とすることが多く、縦格子を採用する場合には格子の間隔をランダムにすることが求められ、テクニカルなイメージとなりやすい。均等間隔であっても、格子のディテールやピッチ次第で壁面に拡散効果を持たせることが可能であると考え、原寸大の模型による音響実験を行い、最終的な形状や詳細を決定した。工事の竣工前段階には、音響性能が確保されていることを聴感で確認した。



オープン形式



プロセニウム形式



仮設舞台による検証



原寸模型による音響実験



沖縄における新たな伝統の表現とは何か

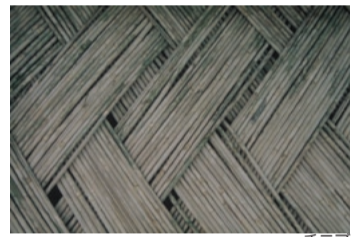
「堅牢で彫りが深く、かつ常に呼吸しているかの如き建築」
沖縄の建築に抱いていたイメージである。

琉球王朝時代の民家の特徴づけるものに、瓦と白漆喰による赤瓦屋根、庇が深い日陰をつくる「雨端」と呼ばれる軒下、格子状に竹を編み込んだ「チニブ」と呼ばれる外壁等がある。厳しい気候に対して培われてきた技術的所産であるとともに、独特の風情と風土を醸す美的所産である。

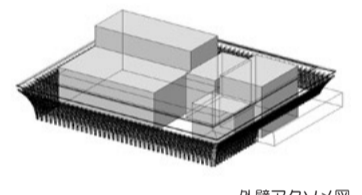
このような所産を丹念に検証し、これを現代の素材と技術を用いて発展的に継承することによって、陽に深い影を刻み、風をゆるやかに呼吸するような建築の実現に努めた。

計画地は那覇新港に隣接した区域であり、建築の性能として特に高い耐候性が求められる。主体構造は鉄筋コンクリート造とし、外壁、庇、及び劇場やロビーの大空間の屋根にプレストレストコンクリート造を採用し、プレストレストコンクリート造の部分は、現場打ちとプレキャストを併用し、特に外壁や庇については基本的にプレキャスト材とした。さらにコンクリート打放し面へのガラス質保護剤の塗布、仕上材の打込み等により性能の向上を計っている。

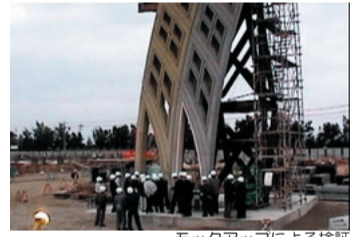
各部位の意匠、材料、色彩等についても、設計段階、施工段階を通して、模型、見本、モックアップ等による検証を行い、選定されている。



チニブ



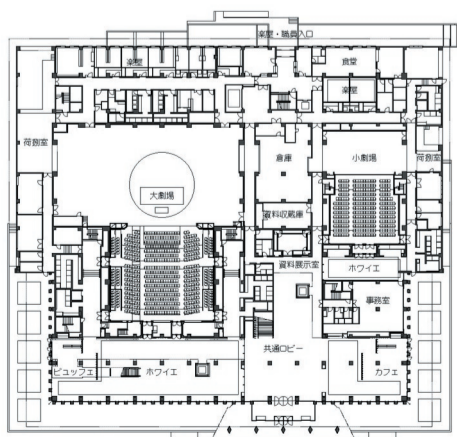
外壁アクソメ図



モックアップによる検証



外壁PCの建方



1階平面図



周辺整備計画図

■ 建築概要

所在地：沖縄県浦添市勢理客四丁目14番1号
 発注者：内閣府沖縄総合事務局開発建設部
 主用途：劇場
 設計：高松建築設計事務所
 監理：内閣府沖縄総合事務局開発建設部
 高松建築設計事務所
 敷地：24,000・
 面積：7,239・
 建築：14,729・
 面積：鉄筋コンクリート造
 延床：一部プレストレストコンクリート造
 面積：地下1階、地上3階